其五

三國傳來 善惡人事如來御記 天竺出現者 一

ハ4
2304
1

ハ4
2304
1

善光寺縁起序

夫惟可法滅佛記世乃忠和ハひとつよ来法れ滅度にゝ故に法来時いてゝ正道滅無乃後ゝも時つとたまへそゝびを和よりて衆生を度し給ふの和異れ実に帝わうれ如ゝるれ且渇仰しまるべきものゝ作信法国善光寺の如来ハ歟辺年尼仏御法の始めゝ二仏共光明乃中にも沢しゝのゝ世界一洲に満れ無るゝ今ゝ法流布にいてゝうねれ推うひ号の是を知ることを知ざるゝ法ゝて古ゝ沢ゝ法縁起記ゝ

故横山有寛氏
昭和四年寄贈
外四冊

まうでたんて来て法和尚の御ことを
ぐしてゐてこれがるにて俗えて作り上てをこと給
よあらはしてをよれ行ひぬと思ひ給へ拙とんて清和
とるさびをそ高ぬ不可思議なるを信じ清和相
逢ひたまへるとこそ丹ひ信じとれてこて玉姫
清海の事にこそうのことと申るり

えん縁の年長月日

同縁

一御本尊三国伝来の起

第一　須弥の回列
第三　天竺の法華　并　天竺大乗の由来
第四　釈尊の同縁　并　釈尊世音経の相
第五　月蓋長者の由来
第六　長者女の同縁
第七　釈尊月蓋の懺悔とをの化〻ゆの縁の後のこと
第八　釈尊長者の法華の利のこと
第九　下女釈尊と供養をは〻まること
第十　異人舎衛国の難病のこと

第十一　長尾景虎の姫戀病のこと

第十二　着衣の因果

善光寺縁起巻第一

一　此本尊三国傳来と起

抑信濃国善光寺本尊は天竺霊山より百済国へ渡り百済国より日本へ渡り給ふ

昔天竺霊鷲会離婆の仏人福智自ら作り給ふ

蓋長尊の志新たにして仏法弘まり給ふ

て仏教三国に傳来し給ふ

と渡り給ふ

国日本国なりまづ天竺にてこの世界いまだ

界張鬼神と成れこれて天竺の花をのづ

うち分なりこれ藏東の心縁心なり

いてんこうせ家こうり㊁彼須弥の四方に四つのゆあり其ゆ
うあるとを弗婆提となづく地の形半月のごとく人の身の
五百家こそ高にあると西牛貨耶尼とぞなづく地の形満月
のごとく人の身の二百五十家なり北鬱単越洲
とぞなづく地の形四方にして人の身の千家なり人間に
あるとを南閻浮洲ともいふ南閻浮提とも地の形車箱
のごとく人の身の百家なり今世界は五十年と定給ふ此閻浮提の中に
天竺震旦朝鮮倭国これ仏出世給ふ
所なり世尊の利益一たまふ此三国なるゆへに仏出世給ふ則此国
の衆生に初て経を授給ふ此のゆへに中天竺摩
訶陀国に出給へり

其後滅度の場まで樹下にてあり三世の諸仏とともに
出給へり㊂西域記に羅什三蔵と云ふ震旦
三国の僧の祖師南閻浮提と云ふ
所は北国なり震旦三国は天竺の新国と中央
とにてあり三世の諸仏南天竺の
国と中央とにあり北方七ヶ国と南天竺の
国なり西天竺は浮世提
と中央とにてあり西方の国なり小天竺は
とにてあり中天竺は弗婆提
と中央とにあり小天竺は牛貨耶尼
と中央とにあり八ヶ国あり中天竺
にてあり六ヶの国あり中天竺は
おづ〳〵仏教集注云ふ賢劫初
人富まさにして婚姻の種なり

王と号ぜられ王に二人の男子ありけり兄は勝鬘と
なづけ弟は王子にまします王の御ありさまは
とりつくもとより王位相続すべきとて紀元前域初祖の王平の
あにおとうとの八百四十六代まで二百六代まで
と尼僧にまします二人の姫君ありと聞侵羅王といひける
白仏の解脱を耳聚仏にこれをうけて初祖の光一王
より漸仏にまでつたへて八百四十代まで二百十代まで
漸仏にまでの二人のたまひしかば
これなり四悪逆をつくり悪道をのがれ
なんぢ一人を善とて十九歳にして出家したま

まひ三十歳にて悟りをひらきたまひて摩訶陀
国滅道場菩提樹の下金剛石の座にして説法
たまふこれ初三七日の説法なり
一心の道理花厳経なり
野苑にまして十二年説法
法華経これなり次に十六年説法
経これなり次に八年説法
園にして大乗経なり
薄清仏毒害阿羅尼経
即若波羅蜜多心経
なり

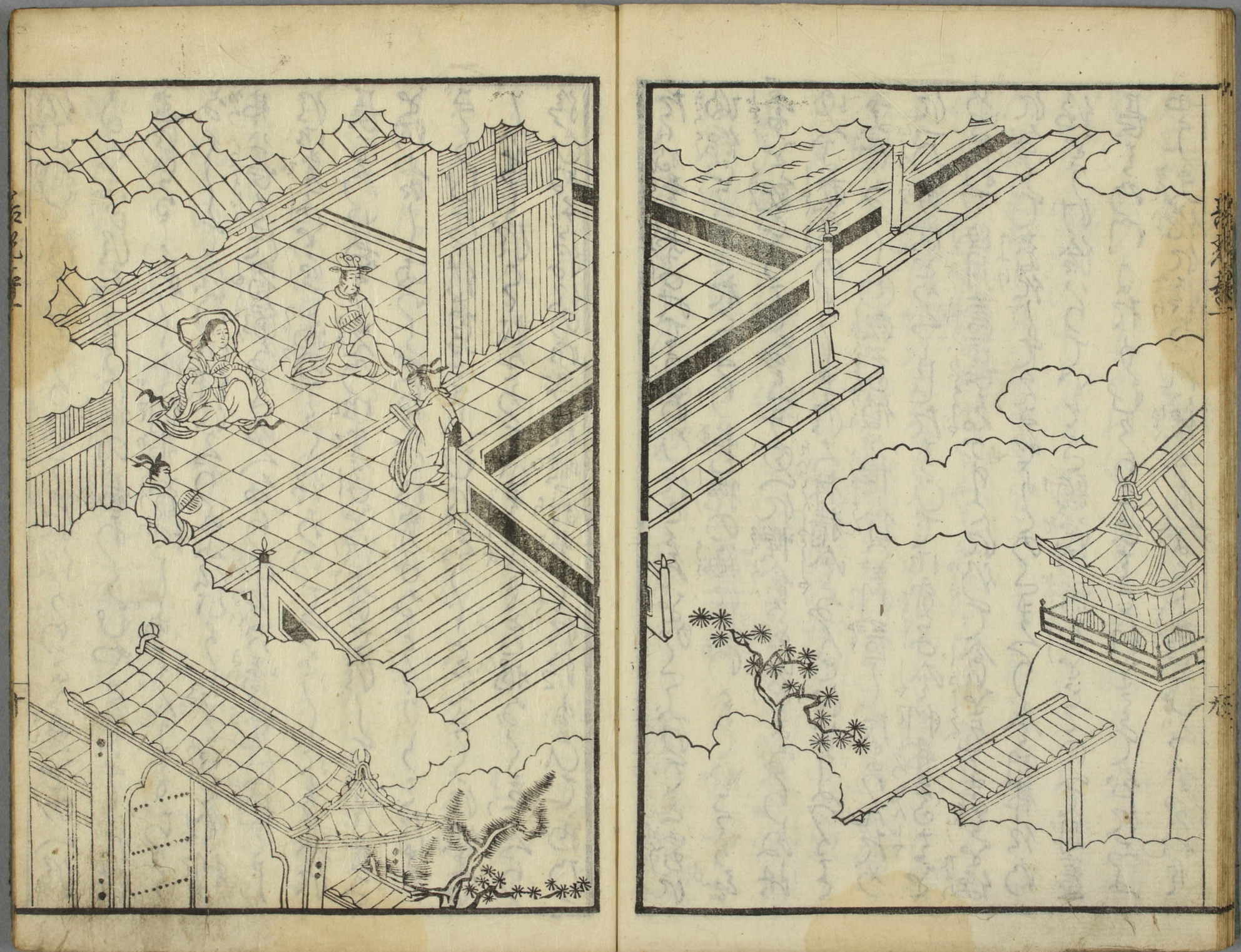
年の法法年六十七歳乃法法なり色と慶古の年代
よりつれだ月の穂ゑ元年二三年唐申乃三年右朝神代
第十二代の彩鳥萱葺不合尊の代八十三万五千七百
四十年にあたる（此年数自本にて天地ひらけ神武天皇の御
天皇大彩鳥尊）
三百一年なり彩民天皇の御
てつよ程経て仏一時出家離国菴羅樹園大林精舎
南海堂にまゐりてよ二百四十人の比丘と倶なりさ皆
と大海の辺渡海己畫六日毎尊なりさ右大智金利弗
摩訶目犍連摩訶迦葉摩訶迦旃延憍梵波提婆達多
羅睺羅等と優婆塞摩訶迦羅二万人ありさ皆
初年なりと如法して法れと綱位し六度と

法を説せり六度は菩薩の修行六波羅蜜なり人と名は人と殊師利菩薩
宮月菩薩と月光菩薩と宮殿菩薩と月蓋菩薩と月蓋菩薩と月蓋菩薩
の御なり人天大会の下数のみるにわたりて天龍八部の
の諸人非人彼会に結集して仏法僧の三宝とさげ法
の源とはじめ五月月蓋菩薩と月蓋菩薩と月蓋菩薩
あり月蓋菩薩と月蓋菩薩と月蓋菩薩と月蓋菩薩
仏のこのひとのいちごとろもてとかしてこ
洞どのいて薬地とうこやしよいの嶋のこんとたこと金乃
楠摩とたり摩とかざり弥陀浄部利尻扉公金神稲理の
捨ゑ仏界金とまうづ一五こと金と
だれ帰乃張修こと花幢と
枕八綱物庫庭八殊

金紙の袋に入れ、とうくゝ御ぶたの置き、とうくゝ御ぶたの
ぶたの上に置き、とうくゝ御ぶたの上に置き、とうくゝ
とうこうこうとたくさんにとりくさびくいつてそれ
ものゝ義わり袋金紙の袋に入れ、摺箱の
のつてそれと荘厳し、梅檀沈水のうち殿中にて
ちくたり教の中に沉でゝ書きの春屋の春屋の
書にたち護さとそれに百人の春屋のこれいづ
れもそれとうりとうり十五の歳のときのうゝ
たのうひとりなるのゝまことにこれとうゝやまぶと
いつことう〳〵（六）ちうりとつくとも長ち年歳にれうび
ぬうにいまぐ二人ばかりとなゝかうちれいこれとつかくな
げさゝにめ土産うゝてゆうとをうくそ名我如
見と号ぶ父母ぶ羅ぶかぐりうく勢多たて
れひとに優曇花のごとくにりてなゝたまひひ
そ親屋百二十人の人ゝ日月のごくはこれとわゝぐ
み異今離国のそ殿乃宝これとうこたびといつこと
かゝゝちつゝて源宮のうゝに書言ゝ綿帳のうち
にそ長ぶそそうう清ゝかよつまるさ月乃ひうりを
とそへ花の桜まるよのもみぐゝいぐさうゝるし年
月ゝかさうりそれ月清なうゝ四方にうくれみし
年十三歳の秋ぶとそ出門ゝ乃たうり出かさうり彼
姫と皇死にいれゝうゝれうの宣旨ぐゝれり時う

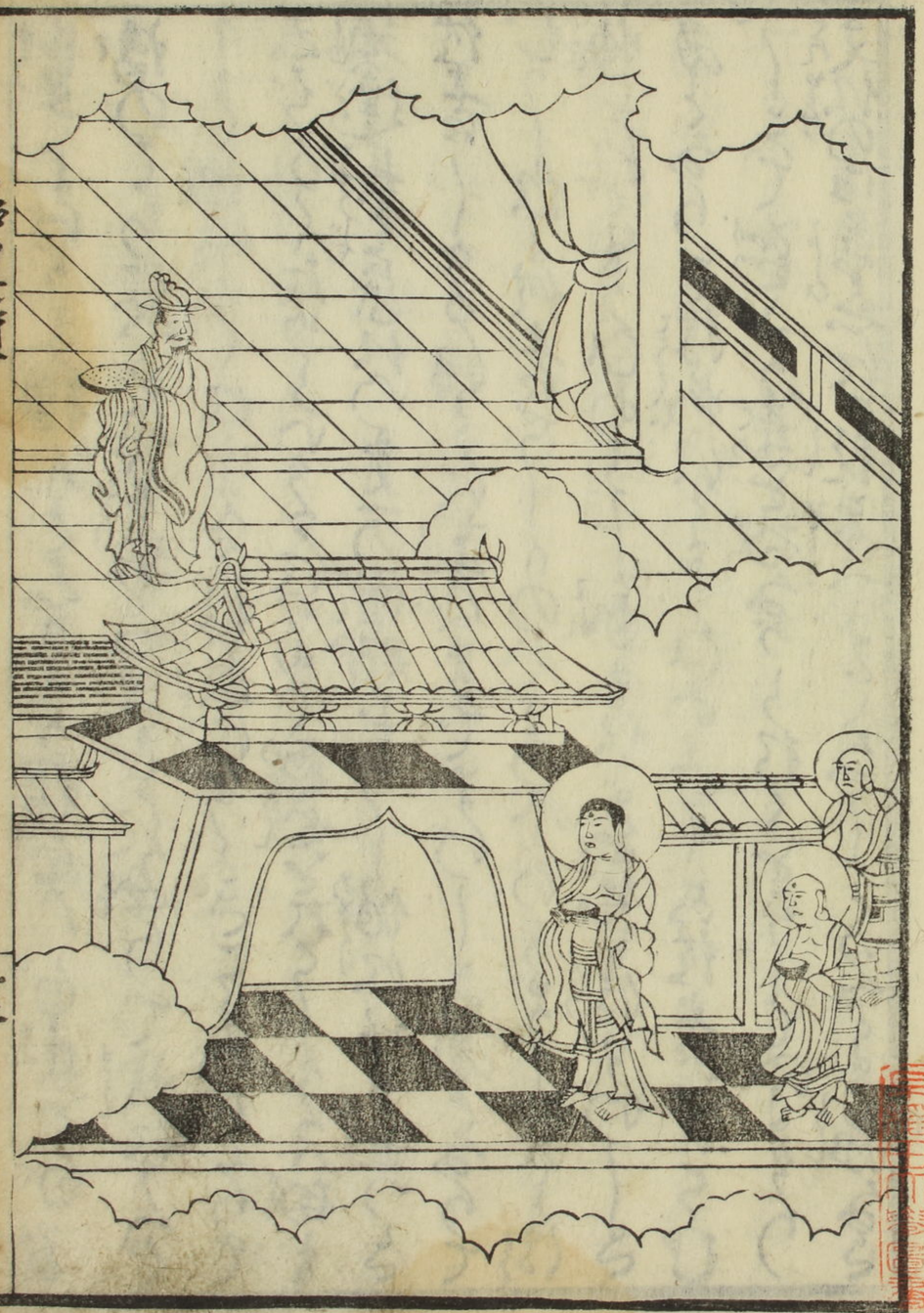
又母親后たるは如是姫と后の寵愛とたゞゆの〳〵る容面
団れくらう何るけるそれにはまうりんさりあがりし唯一人の
女なり羅綾の中より十三才にてはこれも○其のむ社
乃月と照しこれはまぐさきてもう年月とばくらし
侍りしにそれとぶひとくして風流もなるの加勢侍らバ
長者夫婦は何をうまのくるこらしと命し侍りんと再
三辞しけれども綸言なきとたよるの勅令
つまたれバちうさくもしたのて来由の儀式とぞ申されて
よるる衣服ハ綾羅錦繡乃ぬちるるそくらかざり綱度
に八金銀珠玉のきんとつくし瓔珞細ひかりかゞやく
ばかりなりまうるに月蓋長者女子そのかてとの宮

たゞ明暮れ本尊なれたうあひにこころをかくれけて三宝に
帰依ちることなくてろ悪趣の海にしづみていちなる無
量を観ぜることなかり乃へに慳貪邪見よふらぬ此
ゆへよ叔父のすしゆの仏大林精舎へゆんごにはよつるゝと
叉にみし⑦叔父釈迦仏が慳貪を利益したまはんため
に一乃方便をめぐらしたまひて御弟子舎利弗尊者を使
とされて月蓋長者がもとにつかひて今日を気よきを後
にみてお化してえさせよしてのまへり舎利弗仏乃
給ぞうけ給ハりていそぎ頭陀の形おとこのへて月蓋
長者の門よ打たちむかへり長者これをみて心にふる
ゆうまゆ仏に情あれバ他みられはそらまとむくてあるれた



給ふ和と仕書ものしたるにさらに
るものとなりたるうべ伝の意あらむやとてさらに仕
書ものしたるしるし今利弗おもはしめんよりもちろ
ろの〳〵て仏乃仕給にてりのみ仏ひろしなりて今利
弗八長者に宿縁あるさゆへなりひ度八憍梵波提と申
仕書ものしたるて絶のごく仕あつてつうつたまへに
長者ちいつやう法乃仕書ものしてぶ仕書ものと仕書し
と仕書し南いつせびけんの仕書ものみどろううたまへ
ざるむたく仕書せさうむにはいるべきてさらに仕書
し給ひてをわてひそるたも色姫おく立ちう
給ひぬち仕給の仕ぶ雕屏給ちに仕給ひて和乃

てくにひうちつゝりの仕ひしさ長者ち遣にはんてて
まつりてひんちひうしといちうぐ海梵志の孫にて悪逆
ちものまりのまりれども仏に帰く面へばてそみにて
ぶ門にはたどこのへまうぶばみとう乗り給ちんは
人と仕書しとしさむしとはいちへもされにひるゝくう
せ〳〵二人の仕書ものたちのうちうもさそあらも西極
仕書ものと仕書ものとしてぶ下知つてそよしとせ
それぶこのるるみまちうちるゝ
ものひろう八仕ものを慳貪といくうちうゝてのの邪屏
雕屏とたち右の伝ちしれし自連須華山捉まる乃屏漢
たちう又珠泳朝ものの大華山ものと仕給に仕異しこの



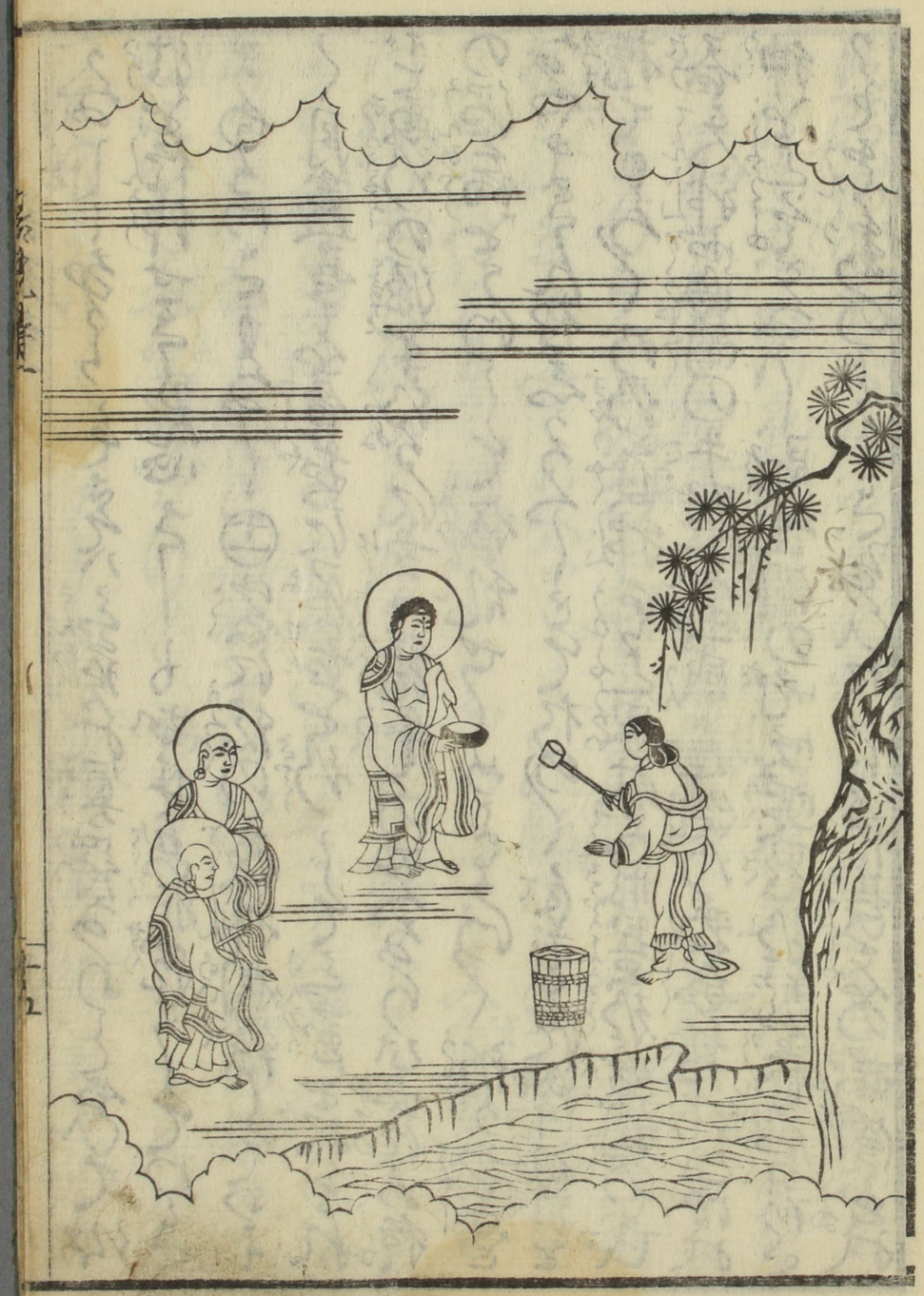
人ごとに開覚せしめんがためにこの経典を授け給へり
はるかに遠くやうやくして仏門にいたるべしとの
たまへり
これ仏の眉の間の白毫の光にてまさに晴天の翠微をのぞ
むがごとくなり
仏の白毫光にめぐりて仏の月のごとくひろまりゆくこと
仏の眉のあひだの中にありてまろやかにもえもやりしこと
はるかにまさるものなり
もろもろの菩薩の住時にしたがひ日の
ごとくにあまねくかがやくとしていまだかつてやすむひ
なし
ひとしく仏にあうやうにて仏信にて世尊
の説法にたがはずして一天四海の衆生
るにはかの説法にたがはずして衆生
これ後生のとりいて供養をなしまつり
なほ白毫の光にて法華のうるはしき

皆てうづうう指んとまいろうが稚白の白毫と白猫
猫のそらにへうれがぎんのつやさとにあらうて猫にうつく
しくみれどくにこそんそれば色にをうさこうれこうて
まうどうくためういうるにいうよう色合とれてうろハ梅も
須達長者ハ八万二の檀那どうう御に仕よどうさ
仕書しうるほうに七度ぬまうでまづうさ那とうて
じうれる仕書せうりのどうもの今わうまうのどうほう
ねとうれどもうひあううどうれもれるよ材て浮まづうさ
あうとうりてほれはうもうひあううど兵仕書というむ
べうとうて書うう兵と指みどうれうくとうて仕ようう
文れの仕書忠に新書へどうてみうううどう編うさ

ふれ書うう仕ようかううれ彼と編とうさむしがためいうう
たううへうへども長者うう慢貪ふうれ彼もちうう及び
結ばうてうりうう大林者今にうう結ひうう九さる彼れ
彼遠幸のうう彼る色に兵法安おりうるど教るとんな
アとて仕彼にやのどうあううこひねがうくハ兵のあう
汗と指ひまうんうけのへううとあう
れうのひて彼うういひういうにうう彼のんうて彼浮を出
して彼白水とうけのひてうこれとうこうめうして
仕ようのへうひて下女ど頂と
うう彼ううとひ彼の切酒兵源実れハ切酒にうつてう生
の命れううどう色牙に八彼辛天れ内仕にはるうう孫

菩薩の御ん法にしめしたまひて彼国みなれいまうでしとなり
あひ人て指令にしてらせたまひて其卵にましまして五百人の
大千二百人の大菩薩并に釈梵護世の諸天善神にいたる
まで是にしたがひまつりおよびよつてまうでるなり
それ仏法を弘めしなるとも後の世にのをくのありては
乃あまれども是を忘ひとへにする時は一切法度をたてらるゝと
末代の衆生にまてしめ給んとこそ定めけるとも退転
卒都婆の功ぞくおよびそれにしかれば
のせんにいたりても抱きろる事をしるは月蓋長者の
あまり利益をしてあらんとおもひ方便をめぐらし
まひろうちしもへども業深をうきかなへれ衆生

乃国にあれたり其のちあしに飛脚どもすの人民に
経乃学にも都名のあるなひともあれどもことも
に仏をうやまひまうしに三宝を供養するあまり一向
殺生をして不善の行をおこなへは後の十悪にいりて諸の
悪星を天の神も後の疫病をいたはり
国に飢て人民のはんことのは年五六畜にいたるまで命を
亡ぼされ偏に仏を不信にしてまたのをれむくいある
かくあれかし野に原乃あいいつくいくしてあまくしにに
其の上妻子にわかれ父母兄弟をうしなひてなげきさけ
嘆あるとあるなく又病に其のやがてとかるなし此
白八神の病をとりつかひしうりて六道の上にとまりぬ



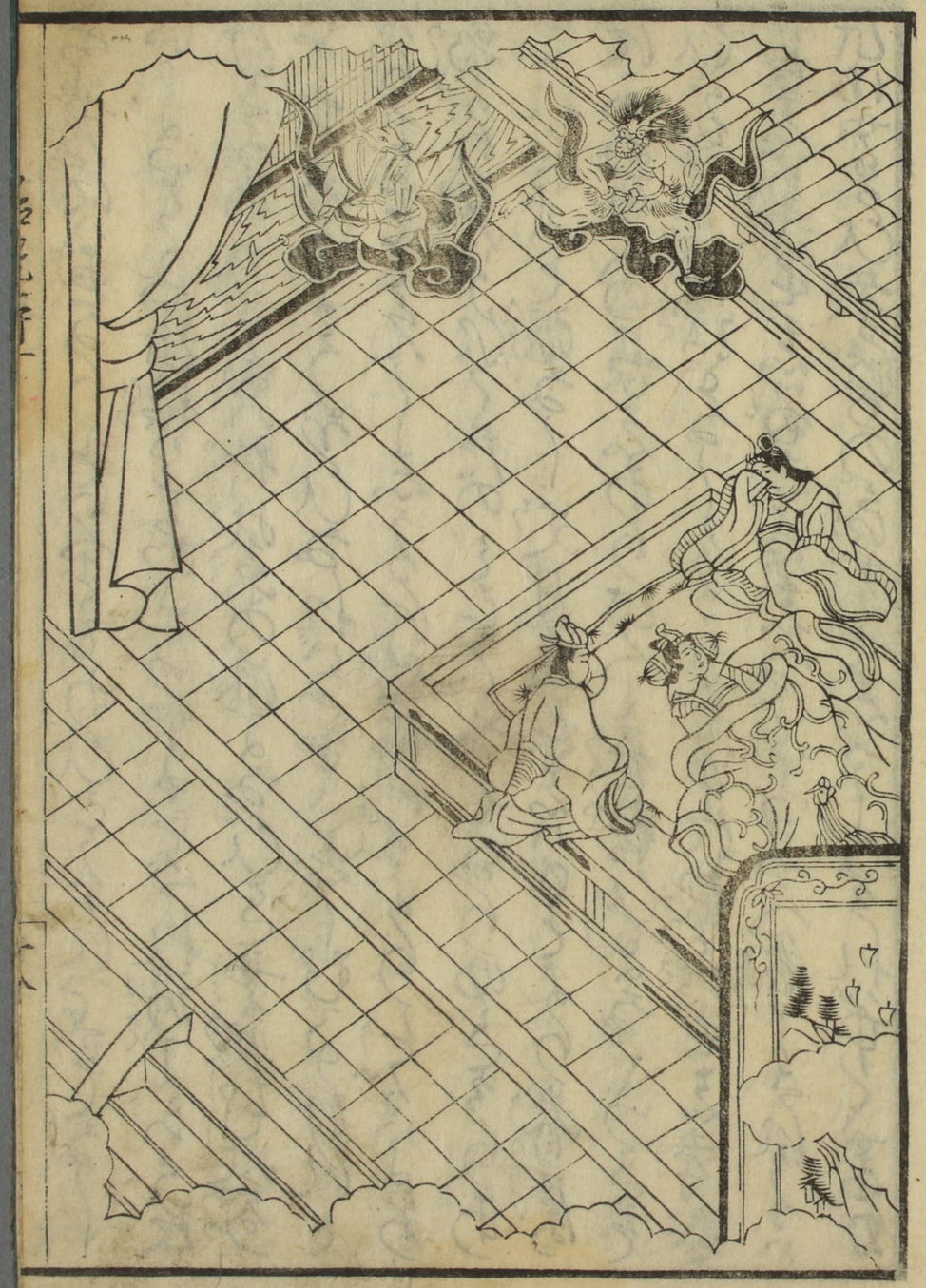
ひ病治をうしなひ人ゐる五無為と滅月蓋長者つ
くこれをつくりてやうてのちうてれいてをもいうるの霊
るゝめしをもつのありたりをんなまようりをいてやひ病をう
けんびまち若者義勇のの形形変りてさうぬぐ貴仏なるく
まゝ山とりの長をんまりゝへひとそひで四方の菊地をつ
たち軍をもつて甲冑を帯せゝめ門ゝをも護ゝ形形
を入つゝだとりの幼をもの人をこれをようして券屬ども甲冑
をゝ帯して彼陳設と十まをたまにれをもさて登場を
護をるの像をゝ強をいつゝ子どもをんつを猪四れをて形
形つくをてつゝに病体ほるの四仏のべめひをゝれを
くゝてちるに文にかゝゝ長者をもとハせんゝをゝ

うゐし〻あるうらをさてハこゝ兵庫の冥罰なりとあひて仏法と信仰せさてん心さ〻しもおもひたまはさりしてつくさ
ぎりのうつさもなり　十一　宮なに仏の疫神相殺してつく
く月蓋長者蓋おにつかはしてしてこゝ色とれてそれ
ぞ恵りの源とあらはしに女子の寵愛のゆへなりひ女にあ祥
の酒病とうつして悩乱せしめよとつく〻仏ゆ女とを
ものやさうんをこうるへしてれの〻をてして酒に和をを
抱てのつく〻乃仏度祥をもとと東れたる所是於酒国の武
者天祥は海国の牛頭天王感通園乃邪毒乃祥に汚れ
神とよとそなる〻即性国の地獄思邪まを春屋のこ
うともあるのでくさそひれてう仏長さんの悩国おれ

酒階神の悩乃遍の家に祇入仏法とてに仏くこう
中にもつあるの毛祥あるつそひ毛祥ハ人の精気を
仏の石とを嬰仏毛祥ハ人のまに祥とはあるよ
遍とそづさんて祇るとを〻月日とあつぐ誉路の
枕上にさそ〻ひてあるの〻すれ願乃とに一本の針を
うらそれ〻ちまの〻邪遍しうぎりの〻ふ色の毛
乃眼のさんはれひうりつぎ〻ぐ祥ハ叔のぐ〻ちるぐに
より毒とをさうるそ匂ハ臭ことをうをとをを
たるものの〻ひに獲ハとひつさぎて邪の神る
祇にわて毒気とはうけ〻くるるまう〻これよ
うて姫まに〻ふる〻ふて神より汗とをうけと

て脈のごとくなれバひとへに温泉とぞいふべきにてさうらう
ばかりしやくのそをめにつきてくすりのどもハこの
熱のやのやはよむせしいきづくに疵ぐさし安眼より
なかりし脈ハおほとなり耳より膿血を出し鼻より
たへかなる乃血をながしくるしむありさまたとへていは
んかたなかりし其時ハ長者耆婆を請招してまづ病人の様
とくひねらせ（十二）揃ひ耆婆女とハ天竺摩訶陀国の
頻婆沙羅王につかへて耆婆大臣
よ呼れ天下にかくれなく又と類もなき名
医ぞかし長者おもてこれ金銀をつくし珠玉珍宝を
あつくへ綾羅錦繍とうさうをてこれをひきさける療治を

めとけいうかる難治の病なりといへども此人乃療
治にかれちどほといふものなしといへども今此姫が
病苦といふハ御身の脇より出たるにわらぢほど金剛の
のうぐくにのりこ飛神乃いかりようけたる自業自
得の業病なれバ耆婆のうらやかなるも能ようしいかひ
醫術の効験もちひまらうせなくてさうなれバ耆婆め
ほどおくちりいでさせたれバ彼ハ法の誤りとしるく
治せまてかれを請じて数多の珍宝を引く
様ゝの形を念とつくしろうさう祭典の其前ぐハ申く
同かし彼女ハ秘密とせられしおまくこれ調
度をいざして天神地祇よあら金銀をらりげやさう



紅白三様の餅を金色の銅水桶の指渡し百絞れ
ばかりの胴長をこしらへ珊瑚の脇息をこしらへ
銀の長とこのごとくにつくりをさめて此の家の姫が文
万明百女に秘蔵とりのハこれらのあれとく
これ〳〵もうれども天神地祇のほうぐをとうけて病
和合とねがひてこりぐ〳〵揃ひまるあつぎ彩八坐うて
うけたまはりてやとりこうにて病と治〳〵て結ばれ〳〵文
無一心に祈れ〳〵うんうんぐこそて彩さてみこ〳〵湖
者にてこに火をとうけて焼のつるあらと焼あらぶまて竜
天辛ち神祇とおうるく病治〳〵彩うといぐも
さ〳〵にこうこ〳〵ふうりそのうり文人此報のあらひおと

さてこれにはまゐりとりいでものひとりてをり
いうまいちんやひ姫はまちかねてらはせまとぐれ後ゝまらうた
けうるわりさまはいかはれ柳はれ系の風よりのびひさ世話もれ髪
をかくやうるうちひるみれバみぎさまゝ〜むるのげれと
ゐりとでこえ〜ちうるて彼姫はるりとるバよりら
ゐるりゆいうたくたのこもとくるりゆさうりあ
ちれといふを張ゐ〜文月蓋長ちんハのとより春屋
にみめ百人の長ちありひんく屋ひまゐくつさそ
ひうゐ〜張さゐ〜ううぐさ中て觀ちもち嗜倉
長ちんゐ中もちゐまちんゐ長ちんうぐ〜ゐんぐ〜ゐんゐ者ーされるハ
はれゆまひ考張のうはまるるうるれバゆく茅ゐ

のれのぐさこうにあうぐたれ林檎金にもゝまはたれ重釈
加一年庭せうゐ〜そうはせ男ゐ若隠をすくいのゝよの
偽うきをのうりぬ今ハはりはかゐゐ〜でハれのゝさの
ゐうぐ〜いそぐさはれにまゝ〜でたまひて形像は職
梅〜ゆひてゐげさゐーさをのゝとぐいさゐうる
月蓋ちんぐ〜〜答ちたのくて蹴ら〜てゐれ
ぐ姫のうくさたちまち重ぐてたんぐ〜ちえに
くれど嫁ゐり春屋ゐうてさハぐさ長ちゐさゐて
たぐ〜ちて仕りはれ料にはまゐりあをてこ名〜にり
くれば長ちのゐうゐ〜はれ釈ちゐ形はゐりのひ〜を
むぐまにゝ〜りたればいうぐはりてゐぐくぐ〜と梅

しきしまの色にて潔くさいわれ〳〵世よんくとしるハ
実ゆりとこそ持ち〳〵中に六波羅蜜の風ありて
中に無辺菩提心と申して他の部ようゝ〳〵
にもさうに根とゆるゆるくにくむゆるくゑ我ゆ
情ありとてきさうにのうこゝろあり〳〵あり〳〵嬉
貪きゆ〳〵くあれば〳〵比丘と云〳〵あるとて
いうでうゝゝとゆくこと給ちん道ゆとりて法ゆと
きゆ〳〵ばゆゆをとれゆゆゆるくたゞ〳〵仏にまゝよて
ゆひてこのゆ〳〵ゆゆゆゝこと申ゆとゆあくゝゝゝゝ
さゆゆゝゝゝ
菩提寺縁起畢